

12/26 2012



Japan Music Education Society **News Letter**

第50号

No. 50

日本音楽教育学会ニュースレター

目次

1 日本音楽教育学会第43回大会の報告	
1-1 第43回大会を終えて.....	2
1-2 院生フォーラムを終えて.....	3
1-3 初めての学会参加.....	3
2 会員の声	
2-1 日韓音楽教育ワークショップに参加して.....	4
3 新刊紹介	
3-1 演奏を支える心と科学.....	5
3-2 根っこのある音楽.....	6
3-3 赤ちゃん学を学ぶ人のために.....	7
4 報告・ご案内	
4-1 平成24年度第3回常任理事会報告.....	8
4-2 平成24年度第2回理事会報告.....	10
4-3 平成24年度総会報告.....	12
4-4 編集委員会から報告.....	18
4-5 第12回音楽教育ゼミナールについて.....	19
4-6 選挙管理委員会からお知らせ.....	20
5 事務局より.....	20
編集後記	

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX：042-381-3562 E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

1 日本音楽教育学会第 43 回大会の報告

1-1 第 43 回大会を終えて

大会実行委員会事務局長 福田 裕美

去る 10 月 7 日と 8 日、たくさんの学会員、臨時会員の皆様のご参加をいただき、活気あふれる中で第 43 回大会を無事に終えることができました。

下道実行委員長から「大会事務局長」の大役を仰せつかったのが今年の 2 月で、3 月 14 日に開催された第 1 回大会実行委員会以降の日々はあっという間に過ぎ去っていきました。事務局長の仕事も初めてでしたが、今年の 4 月に東京音楽大学に着任したばかりの私にとって学内のこともまだよく把握しておらず、すべてが手探りの中でのスタートとなりました。5 月中旬に実行委員会の銀行口座の開設、その後すぐに広告と出展ブースの依頼と取りまとめ、6 月中旬に HP を開設、7 月には使用教室の決定、東京音大卒業生の大柴拓氏デザインの広報用のポスターの完成、8 月にはプログラム完成と、この間、事務局長のご経験のある本多副実行委員長はじめ、実行委員の先生方から多くのご助言をいただきながら、進めさせていただきました。

9 月に入ってから、大会当日を念頭においた作業が増え、研究発表用の教室や百周年記念ホール等の学内施設と機材の使用申請に係る作業が大詰めとなり、最後の 3 週間はタイムテーブルと機材一覧表、大会プログラムを片手に学内の各課に通う毎日でした。新任で学内の担当窓口もわからない中での作業でしたので、次々と抜け落ちていた手続きが出てきて毎日ヒヤリとしながら、とにかく頻繁に各課に通って打ち合わせを重ねました。設備などの面では音楽大学ならではの難しさも多々ありましたが、足りないケーブルや机・椅子の調達、機材の調整、授業日である 8 日の教室変更、60 人という大編成の吹奏楽コンサートの楽器や舞台備品の手配、スクリーンがないホールでのスライド投影の検討、職員手作りの吊り看板と立て看板等々……各課の多大な理解と協力のもと「大会を成功させる」という目的に向かって、大学が一丸となって作り上げていった大会だったように思います。

大会初日はあいにくの雨模様となりましたが翌日は気持ちのいい秋晴れとなり、正会員 383 名、臨時会員 148 名、合計 531 名という過去最高のたくさんの方々にご参加いただきました。これは実行委員会として本当に嬉しいことでしたが、予想人数を大幅に上回ったため、用意していた資料袋が足りなくなったり、席数が少ない教室での研究発表では立ち見となるという想定外の事態も発生しました。また建物が吹き抜け構造になっているために 1 階の出展ブースで発せられる音が予想外に響き渡ってしまい、一部の参加者にご迷惑をお掛けしました。他にも至らない点が多々あったかと思えます。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

最後になりましたが、いつも細部にわたりご対応いただいた学会本部の皆様、あたたかく多くのご助言をくださった実行委員会の先生方、実行委員会企画や HP 作成でご協力いただいた先生方、毎日のように遅くまで残って多くの作業と一緒に乗り越えてきた東京音大の実行委員会メンバー、そして東京音大職員の皆様、大学院生、学生・卒業生スタッフの皆様に、改めて御礼申し上げます。ニュースレターやポスターで事務局長の欄にある私の名前を見た周囲から、「同姓同名かと思っていた！」と言われるほど若輩者で身に余る大役を拝命いたしました。今大会を通して学会の先生方と多くのご縁ができましたこと、そして、本学教職員、学生たちと貴重な体験を共有できましたことは何物にも代えがたく、このような機会を与えていただいたことに心より感謝申し上げます。



◀ 大会実行委員会一同

1-2 院生フォーラムを終えて

東京音楽大学大学院修士課程 野田 かおる

日本音楽教育学会第43回大会を東京音楽大学で開催するにあたり、東京音楽大学大学院生で院生フォーラムの企画・運営を担当させて頂きました。院生フォーラム募集要項を学会誌のニュースレターに掲載して頂きましたお陰で、全国から15名の院生が参加しました。院生フォーラムの募集をきっかけに日本音楽教育学会に興味を持って下さった方からもお問い合わせ頂きました。しかし、申し込みにあたり学会員でない院生からの申し込みは規定により受理することが出来ず、今回参加が叶わなかった院生もいらっしゃいました。また次回以降の参加をお待ちしておりますので、来年以降も多くの院生が参加して頂ければと思います。

院生フォーラムの開催スペースと学校の備品に限りがありましたので、発表に際し一人A0サイズに収めて頂くようお願いしました。ホワイトボード一枚をお二人で共有して頂く形でしたが、皆様のご協力のもと大きな問題なくポスターを掲示することが出来ました。

院生同士の協力のもと予定していた開催時間より前からポスターを掲示したことによって、早くから多くの方に足を止めてポスターをご覧頂くことが出来ました。学会参加者の方々からアドバイスや励ましのお言葉を頂戴し、院生一同有意義な時間となりました。私個人としましても、近いテーマで研究をなさっている先生からご意見を頂くことが出来、大変参考になり嬉しく思っております。

各院生のポスター内容としましては、教科教育のみならず、アウトリーチやピアノ教育、教育史に至るまで多岐にわたる発表が行われました。全国各地の院生に参加して頂いたお陰で、分野の違いだけではなく、各地域による環境の違いが見えたことも興味深い発見でした。他校の院生の研究テーマを詳しく知る機会はありませんので、今後各自の研究を深める上で良い刺激を受けました。

発表場所が通路にもなっていましたので、予定時間を過ぎてからも継続して意見交換が行われておりました。掲示スペースに限りはあったものの、他の研究発表の妨げになるような場所ではありませんでしたので、院生フォーラム終了時間後もそのまま掲示しておけるように手配しておけば良かったと感じました。



▲ 発表会場の様子

このような院生フォーラムを開催することが出来ましたのも、参加者の皆様をはじめ学会事務局の先生方のお陰です。院生フォーラムという貴重な意見交換の機会を与えて頂き、大変感謝しております。ありがとうございました。

1-3 初めての学会参加

桶川市立桶川東小学校（埼玉県長期研修教員） 田嶋 貴子

音楽教育学会に初めて参加させていただきました。様々な視点から研究が進められており、全ての発表を聴くことができたらいいなあと感じるくらい、私にとって、大変魅力的な学会でした。

普段、学校現場で児童を目の前にして、思い悩むことが多々あり、この問題点について解決方法を知らないのは、自分が勉強不足だからと思い、解決策を求め、調べたり人に聴いたり、セミナーに参加したりしてきました。今回の学会では、そんな日頃の悩みの解決策やヒントがたくさんありました。また、みなさんがいろいろな熱い思いをもたれて研究しているということを知ることができました。今までわからないということをあいまいにして、知らないということを自覚せずに突き進んできてしまいました。きちんと立ち止まって考え勉強し、現場での

指導にあたっていかなくなくてはならないと考える貴重な機会となりました。

歌唱指導の中で、声のチェンジポイントについては、大変大きな課題だと感じておりました。うたを歌うと低音の声と高音の声の色がまったく異なり、一人の人が歌っているとは思えないことがよくありました。高嶋氏の「小学校歌唱指導における頭声発声の推移」についての発表は、現場の事実や実態を文章化して、それについての問題点や指導法などについて、詳しく述べておりました。今後参考にして指導にあたっていきたいと思いました。

また、変声期のパートわけについては、どのようなタイミングでどのようにしていくことが児童にとってよいことなのか、今まで私自身あいまいなまま進んできてしまいました。高橋氏の「合唱活動における変声期男子のパート分けに関する研究(2)」についての発表は、実際の音声と資料による説明により、聴覚的や視覚的に現実を知り、理解することができました。児童の中で何が起きているのかを知ることが一番大切であり、指導者はタイムリーにその児童と関わりながら、助言していくことが、継続して歌う意欲につながっていく一因になるのだと感じました。

シンポジウムの中での佐野氏による青森県むつ市の小学校の紹介は、大変印象的でした。VTRの中の小学生は、生き生きと歌っていました。歌いたいから歌っているのだということがよくわかりました。歌いたい気持ちを育てるということは、一言で、こういう教育を展開したから育つと言えるものではないと思いますが、どのようにしたらこのような心を育てることができるのか大変興味深く拝見しました。いつでもどこでも歌いたいと思ったときに歌える心や生活と共に音楽が常に心の中にあること、これこそ生涯にわたって音楽を続けることのできる魂なのだと感じました。

知らないことを知らないということは、とても怖いことだと改めて感じました。学校教育という特定の空間でのみ展開されている教育だけではなく、私たち教師はもっとたくさんの様々な知識や技能を得て、広い視野をもって教育にあたっていかなくてはいけなさと再認識させられました。自分が当たり前のように展開してきた授業や教育活動について、再度考え直し、この方法で間違っていないか、他にもっとよい方法や考え方はないのかなど、常に自分自身に疑問を投げかけながら、日々、教育活動を展開していかなくてはいけなさと感じました。今回の学会は、それに気づくことができる大きな機会となりました。初めての学会は、私にとって大変有意義で様々なことを考えるきっかけとなりました。参加させていただきありがとうございました。

2 会員の声

2-1 日韓音楽教育ワークショップに参加して

お茶の水女子大学大学院 山下 正美

2012年8月25日(土)から26日(日)にかけて、明治学院大学白金キャンパスで行われた日韓音楽教育ワークショップに参加した。韓国からは韓国音楽教育学会のヤン・ジョンモ会長をはじめ8名の先生方が来日され、日本からは50名弱の参加者があった。2日間のプログラムで、パク・ヒドゥク先生による韓国のたて笛タンソの音楽会やワークショップ、榎本秀水先生による日本民謡のワークショップ(ソーラン節、こきりこ節、日向木挽き唄)、授業発表、ラウンドテーブルなどが行われた。

パク先生によるタンソのワークショップでは、タンソ教育の5つの柱(呼・体・持・奏・楽)を先生が大変重視されている様子が印象的だった。5つの柱とは、丹田呼吸、手の屈伸や身体ストレッチ、タンソの持ち方・指使い、吹き方、韓国の楽譜(井間譜)の読み方であり、パク先生は家づくりになどながら、音を出す前にこれらの基礎をきちんと身につける重要性を強調されていた。当日配布されたテキスト『タンソを吹こう Let's play the Danso』(パク・ヒドゥク著、阪井恵訳)の助けもあり、2日目には参加者のほぼ全員が音を出せるようになり、アリランを吹けるようになった方もいた。



▲音楽会で共演した学生にタンソを指導するパク先生



▲授業発表の様子

授業発表では、和田崇先生（江戸川区中学校）がリズムカードや平調子を用いた創作の授業実践について、チェ・ウナ先生（ソウル天王初等学校）がABA形式を学習する4年生（24名）の授業実践について発表し、その後ラウンドテーブルが行われた。チェ先生のスライドにはハングルと漢字が併記されており、「概念的接近法」とその7つの基本概念に「長短、旋律、和声、形式、速度、強弱、音色」のあることなどが読み取れた。机や椅子のない音楽室でカーペットの上に胡坐した生徒たちは、グループ活動や、4拍子に「グー／チョキ／パー／拍手」の手動作をつけるといった活動をのびのび行っているように

見えた。

タンソを演奏する身体の準備から始まったワークショップ、手動作を活用した授業発表などから、筆者は韓国の農楽や僧舞などにもみられる「音楽と同期した身体動作」というものを想起した。ヤン会長のお話によると、韓国では小1・2年生に「音楽」という単独の授業はなく、「たのしい生活」という授業の中で、音楽・美術・体育に相当する授業が行われているということだった。また、生徒の自殺が多いという教育問題を背景に、学歴を重視する教育から「人生教育」への転換が図られ、そこでは体育と芸術が重視されているという。「タンソを吹くことは健康にも非常に良い」というパク先生のお話にも何か通じるものがある。ラウンドテーブルの最後には、今後さらに韓国音楽教育の歴史や理論的背景、音楽美学的な諸問題を共有し、議論を深めていく必要性が指摘された。具体的には、「西洋音楽」「民族音楽」「器楽」といったカテゴリーが教科書でどのように扱われているか、学校で伝統音楽を取り上げる場合に、その礼作法や奏法といった伝統的文脈をどう扱っていくのかといった質問が寄せられた。なお、今回ヤン会長からは韓国の教科書一式と韓国音楽教育学会誌が加藤会長へと手渡されたので、会員諸氏の研究活動にぜひ役立てられたい（韓国では小3から高1まで教科書があり、小3・4は国定教科書が用いられ、小5から高1までは検定教科書が各3～8種類あるとのこと）。今後も音楽教育における諸問題を共有しながら、日韓両国の相互理解が深まることを願っている。

尚、写真は、ワークショップ実行委員よりご提供頂きました。ありがとうございました。

☞ このワークショップの冒頭に行われた小音楽会のDVDが若干枚あります。

お問い合わせは阪井恵 <megumi.sakai@meisei-u.ac.jp> まで

3 新刊紹介

3-1 演奏を支える心と科学



安達 真由美（北海道大学）・小川容子（岡山大学）監訳

Richard Parncutt, Gary E. McPherson (編集)

The Science and Psychology of Music Performance:
Creative Strategies for Teaching and Learning
(Oxford University Press)

誠信書房 2011年9月刊行
全413頁, 5,670円(税込)

ISBN: 978-4414306262

本書は、「The Science and Psychology of Music Performance」全21章のうちの15章を邦訳したものです。各章はいずれも、音楽心理学者や音楽音響学者、生理学者といった科学畑の研究者と、音楽畑の演奏家及び音楽教育学者がペアとなって協同執筆しております。ですから、音楽学習や演奏、音楽教授といった、私たちにとって馴染みの深い分野の話題が、平易な言葉で紹介されており、諸実験のデータもとても丁寧に説明されています。実証的な基礎研究が音楽現場とどのように関わっているのか、なぜこうした実験手続きが必要なのかといった素

朴な疑問についても、読み解くことができると思います。決して、科学用語や医学用語のオンパレードではありません。研究者の方はもとより、音楽教育をベースに音楽心理学や音響学を究めたいなあという方、心理学をベースに演奏技術を深めたいと思っている方、これから音楽心理学の勉強を始めようと思っている方、ピアノ教師や音楽療法士・・・どなたにとっても、とても興味深い内容であると自負しております。

構成は以下の通りです。本学会の会員を含め多くの皆様（総勢 25 名！）のおかげで、本書が完成いたしました。〈〉内に担当された訳者の氏名を記しました。改めて御礼申し上げます。

第 I 部 音楽家への道

音楽的潜在能力〈河瀬 諭・高須 一〉、環境からの影響〈井手口彰典・貞方マキ子〉、動機づけ〈吉野 巖・疇地希美〉、演奏不安-“あがり”という現象〈尾山智子・吉江路子〉、音楽演奏を可能にする脳のメカニズム〈星（柴）玲子・柴山拓郎〉、音楽医学-演奏家の健康を守るために〈正田 悠・佐藤正之〉

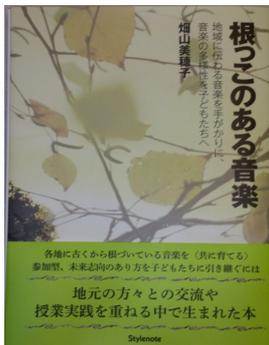
第 II 部 音楽演奏にかかわる各種技能

音から音符へ〈小川容子・山崎晃男〉、即興演奏〈高岡 明・安田晶子〉、初見視奏〈大澤恵恵・安達真由美〉、練習〈吉野 巖・権藤敦子〉、記憶-音楽演奏における記憶方略〈丹藤克也・水戸博道〉、イントネーション-音楽演奏におけるピッチ感覚とは〈松永理恵・荒川恵子〉、楽曲構造のコミュニケーション〈雨池圭位子・村上康子〉、感情のコミュニケーション〈松永理恵・今田匡彦〉、身体の動き〈正田 悠・森下修次〉

☞ <http://www.seishinshobo.co.jp/book/b93174.html#pagetop>

3-2 根っこのある音楽

畑山 美穂子（神奈川県葉山町立葉山小学校）著



スタイルノート社 2012年10月刊行
全128頁，2,000円+税
ISBN: 978-4-7998-0110-9C3037

脈々と続いてきた時間の中で、自然と共に暮らす人々が、その環境に根ざして表現してきた音楽のことを、本書では「根っこのある音楽」と呼んでいます。各地に古くから根づいている、おはやしや民謡などの音楽は、限りない多様性をもっており、こうした音楽と音楽のある環境を、子どもたちに引き継いでいきたいという思いから本書は書かれました。はじめに、日本各地に伝わる音楽を、照葉樹林文化論などを当てはめながら分析します。そのほか、構造主義の理論を応用した考察、環境教育学的な面からの考察などもなされます。具体例としては、神奈川県三浦郡葉山町に伝わる伝統的な音楽を取り上げます。木遣り唄と舟唄、そして鎌倉節について、歴史などとともに解説。歌詞も掲載されています。多様な地域の伝統音楽を保存する一例として貴重な資料になりそうです。（出版社からのコメントより）

=目次=

第一章 四つの思考の枠組みで日本の各地に伝わる音楽を聴く

1. 樹林帯の分布を手がかりに根っこを探してみる 【生態学的思考からアプローチ】

《はじめよう》 日本文化形成論へなされた問題提起から

《広げよう》 照葉樹林文化とは／照葉樹林文化と稲作文化／ナラ林文化とは

《掘り下げよう》 重層する文化と各地に伝わる音楽の位置

2. 音楽の根っこから歴史をたどってみる 【歴史的思考からアプローチ】

《はじめよう》 うたの原始から十九世紀まで

《広げよう》 うたと生活

《深めよう》 二〇世紀 そしてこれから

3. 〈神話〉で音楽の樹の断面を透かしてみる 【哲学的思考からアプローチ】

《はじめよう》 各地に伝わる音楽と〈神話〉

《広げよう》 構造主義の立場からみた〈神話〉／〈自然系神話〉と〈社会系神話〉

《掘り下げよう》 新しい〈神話〉の誕生まで

4. 音楽が生長する！ 【環境教育学的思考からアプローチ】

《はじめよう》 現在の音楽環境

《広げよう》 未来の場所へ／各地に伝わる音楽をゆるやかな循環の発想でみると・・・

《掘り下げよう》 育てていく音楽

第二章 葉山に伝わる音楽より

1. 木遣り唄 キーワード：木遣り唄，伊勢音頭，戦争，木古庭，一色

《はじめよう》 木遣り唄とは

《広げよう》 伊勢音頭との関係？

《掘り下げよう》 戦争と葉山の木遣り唄／木古庭と相州葉山一色木遣保存会の木遣り唄

2. 船唄 キーワード：船唄，熊野，真名瀬

《はじめよう》 船唄とは

《広げよう》 熊野との関係？

《掘り下げよう》 今きくことのできる船唄／船唄の歌詞〈松揃〉

3. 鎌倉節 キーワード：鎌倉節，猿楽，田楽，ややこ，長柄

《はじめよう》 鎌倉節とは

《広げよう》 猿楽や田楽との関係？

《掘り下げよう》 長柄のややこ／〈新玉〉〈鎌倉〉〈淡島様のうた〉

3-3 赤ちゃん学を学ぶ人のために

小西 行郎・遠藤 利彦（編）

音楽に限らず，保育・教育にとって最も基本となることは，子どもの発達について基礎的な知識を有した上で，子ども一人ひとりにあった援助を行うということでしょう。しかしながら，乳幼児保育・教育場面においては，未だ昔ながらの思い込みや経験に依存した育児法が氾濫しています。また，核家族化が進み，1人で子育てをしなければいけないお母さんにとっては，育児についての情報が以前よりも重要になってきていると思います。こういった背景の中，近年，ことばを話す前の赤ちゃんに心の状態や動きを雄弁に語ってもらう，画期的な方法が次々と開発され，赤ちゃんの発達に関する知見が急激に増えてきました。また，それらの研究は文系理系を問わず，非常に様々な分野にわたって行われ，「赤ちゃん学」という一大総合分野を構築するにいたっています。こういった知見に基づいて，赤ちゃんのことを知り，理解した上でその赤ちゃんに合った方法で育児・保育・教育を行っていくことが重要であることはいうまでもありません。ところが，これらの研究結果や知見は，様々な分野にわたるが故に，まとまって耳にする機会は少ないという現状があります。また一部の専門雑誌や論文で報告されたり，難解なことばで語られるために一般に知れ渡ることもまだまだ稀少であるといわざるを得ません。

本書は，様々な分野の研究者が，「赤ちゃん」というキーワードの元に行ってきた研究やその知見を一同に会し，赤ちゃんとはどのような存在なのか，またその発達はいかなるものであるかを，できるだけ総合的にかつ平易に伝えようという書です。「赤ちゃん学」という言葉が示すとおり，その内容も多岐に渡り，身体・感覚から社会性，環境との相互作用，発達障害にいたるまで，最新の研究結果が分かりやすく網羅されています。その中には，これまでの思い込みや常識を覆すような新たな発見や，育児・子育てに励むまたはこれから励んでいこうとする方々への，指針となるような提言がいくつもなされています。われわれ成人の誰もが経験してきた過程—赤ちゃん—。誰もが通ってきた道であるにも関わらず，成人となった今，自身が赤ちゃんのときに，何をどのように見たり，聞いたりしているのか，そしてそれらの情報から何を感じ取っているのかを覚えている人はほとんどいないのではないのでしょうか。科学が明らかにした

赤ちゃんの本当の姿を正に理解することで、われわれも経験したはずの赤ちゃんの世界を再度味わってみてはいかがでしょうか？また、音楽とヒトの関わりを赤ちゃんの目線から考えることで、音楽教育研究が育児・保育・教育に果たしうる役割を再考するよいきっかけになるのではないのでしょうか？

本書は大きく3つのパートからなっています。

パート1「赤ちゃんが体感する世界」

赤ちゃんの知覚・認知の実態や身体運動・生理の仕組み

パート2「他者とつながる赤ちゃん」

赤ちゃんが他の人といかにかわるか、感情とことば、社会性の発達

パート3「赤ちゃんと暮らす」

赤ちゃんにとっての家庭や保育所などの環境がどのようなものであるのが望ましいかなど、また上記に加え「チンパンジーと赤ちゃん学」、「ロボット学から赤ちゃんの発達を考える」、「赤ちゃんと音楽」の3つのコラムが各々のパートの終わりに掲載されています。

世界思想社 2012年10月刊行
全324頁, 2,520円(税込み)
ISBN: 978-4-7907-1570-2

執筆者：山根 直人 (理化学研究所脳科学総合研究センター)

4 報告・ご案内

4-1 平成24年度第3回常任理事会報告

日時：平成24年10月6日(金) 13:00~14:45

場所：東京音楽大学 J館 201

出席者：加藤, 有本, 今川, 伊野, 今田, 小川, 奥, 北山, 佐野, 島崎(記録), 寺田, 水戸

加藤会長の開会宣言に続いて、今川事務局長から時間の関係で会務報告以外の報告事項は理事会に回すことが提案された後、第1回理事会以降の会務報告が行われると共に、今後の予定が確認された。

会務報告【平成24年5月13日以降】

<平成24年>	
5月13日	平成24年度第1回編集委員会(立教大学) 平成24年度第1回常任理事会・理事会(立教大学)
6月15日	第43回大会発表・共同企画申込締切
7月1日	『音楽教育学』第42巻第1号, ニュースレター第48号発送
7月29日	平成24年度第2回常任理事会(聖心女子大学)
8月2日	平成24年度第2回編集委員会(昭和女子大学)
8月25・26日	日韓音楽教育ワークショップ 会場: 明治学院大学
8月27日	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.10 No.1, ニュースレター第49号発送 第43回大会プログラム発送
10月6日	平成24年度第3回編集委員会, 平成24年度第3回常任理事会・第2回理事会(東京音楽大学)
10月7・8日	第43回大会・総会 会場: 東京音楽大学
10月7日	平成24年度総会(東京音楽大学)

今後の予定

12月下旬 <平成25年>	『音楽教育学』第42巻第2号，ニュースレター第50号発行
2月	平成24年度第4回編集委員会，平成24年度第4回常任理事会
3月	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.10 No.2，ニュースレター第51号発行 平成24年度会計決算

【審議事項】

1 総会議題の確認

今川事務局長から平成24年度日本音楽教育学会総会資料の説明があり，常任理事会で総会議題の確認を行った。

2 平成25年度事業計画

今川事務局長から平成25年度事業計画（案）が再提示され，平成25年6月下旬の選挙に関する訂正の確認が行われた。▶14～15頁に掲載。

3 第44回大会について

今田理事から平成25年の第44回の弘前大会は10月12・13日開催予定であること，および教育学部の改修工事後であり教育学部が会場となることなどが伝えられた。

4 第45回大会候補地について

現在大会開催地は，関東とそれ以外の地区が隔年で担当しているが，平成26年の第45回大会候補地は関東地区が担当となるため，関東の候補大学に打診することとなった。

5 来年度ゼミナールについて

佐野理事から平成25年度ゼミナールの日程，場所，内容等についての説明がなされた。

○日程：2013年8月24・25日 ○場所：立教大学

○内容：次の2本立てで実施することが確認された。

・授業のフィールドに開かれた内容：テーマ「最先端の授業研究を学ぶ」

・海外に開かれた若手研究者を支援する内容：テーマは国際交流委員会で検討中。

なお全体テーマ，実行委員会の立ち上げ，会員へのインフォメーションなどを速やかに行うことが確認された。

6 大会発表応募要領について

大会研究発表応募に関して，現在，問題となっているのは，①申込み時点での研究発表者自身のチェックが不十分である，②発表件数の制限がないため申込件数が多く，発表会場等の設営が困難になってきている，という点である。①については，発表者は研究協力者等から必要な了解を得ること（例えば，映像許可，記名許可など）や発表要旨の最終確認等について申込時のチェックリストを強化する。②については，できるだけ重複発表を避け，口頭発表および共同企画それぞれの発表件数の上限に関する規定を明確にするなど，寺田理事から改善案の提案と説明があった。来年度の大会時における提案をめざし，企画担当常任理事でさらにより良い方策の検討及び原案を完成させ，同時に他学会の規定についても検討することが確認された。さらに第2回理事会でこの件を常任理事会に一任してもらうこととなった。

7 会員資格等について

北山理事から会員制度の改正案についての提案がなされた。時代の流れを考慮して，名誉会員については，今後，新たな推薦を行わないことが確認された。団体会員（研究機関や図書館等）および賛助会員の権利や規定等を明確にすると共に，特別会員（海外在住者）制度，学生会員も含め，会員資格全般的について，来年の総会に向けて，内規の検討と整理を行うこととなった。

8 日韓音楽教育学会の今後の交流について

日韓音楽教育学会の今後の交流について、有本副会長から提案が行われた。文化の違いから来るさまざまな困難があるが、今後の交流のあり方については、慎重に検討し、日韓の合議による交流内容を文章で確認し合うことになった。

*次回常任理事会 平成 25 年 2 月 23 日, 14 時から, 聖心女子大学。

4-2 平成 24 年度第 2 回理事会報告

日 時：平成 24 年 10 月 6 日（土）14：30～17：00

場 所：東京音楽大学 J201 室

出席者：加藤、有本、今川、伊野、今田、小川、奥、北山、佐野、島崎、寺田、水戸（記録）、
本多、安田、吉富、福井

【報告事項】

1 会務報告

加藤会長の挨拶に続き、今川事務局長から会務報告が行われた。▶8 頁に掲載。

2 各委員会等報告

○編集委員会

本多理事から、①『音楽教育学』では研究論文をはじめ各種投稿論文を募集中であること、②『音楽教育実践ジャーナル』では第 10 巻第 2 号の特集投稿原稿の採否を決定し、編集作業に入ったこと、第 11 巻第 1 号の原稿を募集中であるとの報告があった。また、③『音楽教育実践ジャーナル』第 10 巻第 1 号から抜き刷りを作成できることとなり、今後、初校のお知らせの時に、抜き刷りの希望調査を行うことになったこと（執筆者の個人負担）、④書評公募のページを学会のホームページに開設したことに伴い、学会誌掲載の書評対象候補を募り、多くの書評の投稿を期待したいとの報告がなされた。

○国際交流委員会

今田理事から、来年度のゼミナールにおいて、日本の優れた研究を海外に発信するための分科会を設けることが報告された。

○選挙管理委員会

今川事務局長から、委員長に中嶋俊夫会員、副委員長に寺田己保子会員が選出されたこと、来年の選挙に向けて、第 1 回の顔合わせ委員会を今大会中に開催予定であるとの報告がなされた。

○広報委員会

小川理事から、ニュースレター第 50 号の原稿締め切りが 11 月 5 日であることが報告された。

○倫理綱領作成委員会

今川事務局長から、①第 1 回委員会を 8 月 16 日に聖心女子大学において開催したこと、②第一次、第二次ワーキンググループの答申に基づき、日本学術会議の声明及び、他学会の事例検討をふまえて綱領作成方針を確認し、綱領案の作成に着手したこと、③本学会の綱領案について、来年度大会時の総会の議案とできるよう準備しているとの報告がなされた。あわせて、本年度のテーマである著作権については全会員を対象としたアンケートを倫理ワーキンググループで実施したが、倫理の問題に学会全体で取り組むにはまだまだ意識が低い状態であり、綱領が制定された後、綱領作成過程での議論や、教育・研究活動における事例を整理して会員に発信することなど、委員会の業務として検討しているとの報告がなされた。

○音楽教育支援ポータルサイト

加藤会長から若い会員を中心として活発に活動中であること、活動資金を学会基金から出すことが第 1 回理事会で承認されたので、今後 Web を用いた広報活動などを積極的に行っていくことが報告された。

○将来構想ワーキンググループ

北山理事から会員制度の改正案についての提案がなされた。▶13頁に掲載。

○音楽文献目録委員会

今川事務局長から、①委員：長野麻子，山原麻紀子，木間英子，委員長：樋口隆一（敬称略）が再任されたこと，②音楽文献目録発行部数の削減（600部から400部），IAML派遣補助金の削除，③音楽文献目録40号発刊記念事業として，1号～40号までの総索引を作成し，Webで検索できるシステムの構築を計画中であること，④個人からの寄付要請の広報依頼があり，事務局判断で，寄付案内のチラシを大会受付に置くことが報告された。

3 地区例会報告

北海道地区：8月4日（土）13：30～16：30 北海道教育大学釧路校研究B棟7階（B703）にて開催。5件の研究発表が行われた。教育実践現場からの発表2件や大学生による能楽の実演も含めた発表など，盛り沢山の内容であった。参加者は18名で終始和やかな雰囲気の中，活発な議論が行われた。

東北地区：今年度はまだ行われていない。今年度の当番地区は福島であるが，福島大学で開催できるかどうかを模索したい。

関東地区：今年度の計画は未定。

北陸地区：今年度は，来年2～3月に新潟大学で開催の予定。新潟で開催の場合，地理的な問題で福井，金沢からの参加がいつも少ないのが課題。2年連続で地区例会の日程が日本学校音楽教育実践学会と重なった。今後は両学会の例会担当者同士で日程を調整する，もしくは共催の可能性も探りたい。

東海地区：昨年度は3月10日に岐阜大学で開催した。以前は年に2回開催していたが，4年前から3月のみの年1回開催となっている。内容は，修論発表と会員による研究発表やワークショップなど。本年度も来年3月に愛知のいずれかの大学で開催予定。

近畿地区：近畿地区は，例会を年2回開催。5月19日（土）13：30～17：20に和歌山大学にて開催。卒論2名，修士論文3名，一般会員2名の発表が行われた。参加者は25名。

中国四国地区：例年3月に行っているのので，今年度も来年3月に開催予定。詳細は未定。

九州地区：昨年は熊本大学で開催。今年度は3月16日（土）に長崎大学で開催予定。

4 日韓音楽教育ワークショップ報告

水戸理事から，明治学院大学にて8月25日（土）26日（日）に開催され，日本から50名，韓国から8名の参加があったことが報告された。

【審議事項】

1 総会議題の確認

今川事務局長から日本音楽教育学会総会資料の説明があり，総会議題の確認を行った。

2 平成25年度事業計画及び補正予算

今川事務局長から平成25年度事業計画（案）が提示され，平成25年6月下旬の選挙に関する訂正の確認が行われた。

3 第44回大会について

今田理事から，第44回大会について，10月12日（土）13日（日）に，弘前大学教育学部と50周年記念ホールで行うことが説明され，承認した。

4 第45回大会候補地について

加藤会長から，関東開催候補地として候補大学に打診することが説明され，承認した。

5 平成25年度ゼミナールについて

佐野理事から，来年度のゼミナールについて提案され，承認した。▶19頁に掲載。

6 大会研究発表応募要領について

伊野理事と寺田理事から、大会研究発表応募の問題点について説明が行われた。あわせて、来年度の大会研究発表応募要領に間に合わせるため、今後の検討を企画担当理事が行い、正式決定を常任理事会に一任することが提案され、承認した。

7 日韓音楽教育学会の今後の交流について

有本副会長から、日韓音楽教育学会の今後の交流について①論文の交換、②指導要領の情報交換、③研究授業等の参観と情報交換、④研究発表の促進、⑤共同ゼミナール開催の可能性の探究について協議を行っていることが報告された。あわせて今田理事より、同件について国際交流委員会でも検討が行われ、①日韓の交流は、物的な交流（学会誌など）を主体とし、人的交流は副次的なものとする（たとえば、学会誌の特集を組む際、韓国からの論文を含める）、②3年か2年に一度、大会に韓国の研究者を招いたり、大会にあわせて3年ごとに韓国関連のシンポジウムをすることが提案され、引き続き検討することとなった。

8 新入会員及び退会者について

今川事務局長から、14名の新入会員と5名の申し出退会について報告があり、承認した。

9 その他

大会プログラムに掲載される発表者の所属について質問があり、申し込み時点での所属もしくは職業が記載されることが原則であることが確認された。この件に関しては企画担当理事を中心にあらためて検討することとなった。

新入会員（平成24年7月29日以降）：14名

【10月1日現在 正会員数：1498名 学生会員数：2名】

* 次回理事会（平成25年度第1回理事会） 平成24年5月19日の予定。場所未定。

4-3 平成24年度総会報告

日時：平成24年10月7日（日）18：10～19：00

場所：東京音楽大学 百周年記念ホール

開会に先立ち、今川事務局長より出席者数68名、委任状356名、総数424名であることが確認された。会員総数の5分の1の定足数（300名）を満たしていることにより、総会の成立が報告された。

1. 開会の辞 有本真紀副会長

2. 挨拶 加藤富美子会長

3. 議長選出 小原伸一会員（宇都宮大学）が選出された。

4. 報告事項

1) 会務報告（今川事務局長）

総会資料にもとづき、平成23年10月24日（昨年度奈良大会以降）～平成24年10月8日までの会務報告が行われた。

2) 各種委員会報告

(1) 編集委員会（尾見敦子委員長）

総会の資料にもとづき、「論考」に関わる『音楽教育学』投稿規定における軽微な修正について報告された。

改正 (新)	平成23年10月 奈良大会総会時 (旧)
<p>II 2. イ 「研究報告」(research report)とは、学会誌にふさわしい内容の「中間報告」「調査報告」などをさす。</p>	<p>II 2. イ 「研究報告」(research report)とは、学会誌にふさわしい内容の「中間報告」「調査報告」「論考」などをさす。</p>
<p>II 3. 「研究論文」「研究報告」「論考」「書評論文」の掲載は、会員1人につき1年度に1件を限度とする。</p>	<p>II 3. 「研究論文」「研究報告」「書評論文」の掲載は、会員1人につき1年度に1件を限度とする。</p>

(2)国際交流委員会 (今田匡彦委員長)

平成 25 年 8 月に開催予定のゼミナールに関わって、英語で海外に研究を発信するプログラムを企画中であることが報告された。また、平成 25 年 (2013 年) 7 月にシンガポールで開催される APSMER についての案内と参加の呼びかけがなされた。要旨申込みの締切は 10 月 15 日である。

(3)選挙管理委員会 (中嶋俊夫委員長)

メンバーの互選により、委員長は中嶋俊夫会員、副委員長は寺田己保子会員に決まったこと、来年度選挙が行われることが報告された。

(4)学会賞審査委員会 (加藤富美子会長)

今年度は審査年 (2 年に 1 回) にあたらないので特に活動はしていない。

(5)広報委員会 (小川容子委員長)

ニューズレターが充実していることの御礼と、「会員の声」を募集中であることが報告された。

(6)倫理綱領作成委員会 (権藤敦子委員)

加藤会長より会則第 3 章第 18 条に則り、5 月 13 日理事会の承認を得て、当委員会が立ち上げられたとの報告があった。続いて、委員の互選により権藤敦子会員が委員長となったこと、本学会の綱領案について、来年度大会時の総会議案とすることを目指して綱領案の作成に着手したこと、綱領制定後綱領作成過程での議論や教育・研究活動における事例を整理して発信することが委員会の業務として検討されていることが報告された。

(7)音楽文献目録委員会 (木間英子委員)

音楽学会選出の樋口隆一氏が委員長に選出されたこと、厳しい財政状況のため今後は発行部数を 400 部へ縮小するなどの措置がとられること、1 号～40 号のタイトルのウェブ検索システムが検討されていることが報告された。

(8)音楽教育支援ポータルサイト (加藤富美子会長)

若い会員や参事を中心に活動していること、学会ホームページにバナーを置き、予算面でのバックアップが始まったこと、今本当に必要な支援は何かを明確にしながら、長期間にわたる支援をと考え、楽器・楽譜等の提供を行っていることが報告された。

(9)将来構想ワーキンググループ (北山敦康理事)

会則第 2 条の会員の規定 (正会員、名誉会員、特別会員、学生会員等) について、状況の変化に応じて実際に見合うように再定義をする必要があること、学会会則の目的の項の見直しを、今後行うことが報告された。

3) 日韓音楽教育ワークショップ報告 (水戸博道実行委員長)

日韓ワークショップが平成 24 年 8 月 25 日・26 日に明治学院大学において開催されたこと、参加者は日本から延べ 50 名、韓国から 8 名であったこと、日本・韓国から実技系ワークショップと授業紹介が各 1 つずつ行われ、個人研究発表はなかったが、交流が深められたことが報告された。併せて、労力と成果とを照らし合わせて今後の方向性を考えていく必要がある等、今後、常任理事会等も含め検討していくことが報告された。

4) 来年度ゼミナールについて (佐野靖理事)

2013年8月24日・25日、立教大学で開催予定であることが報告された。内容については、英語で研究を海外に発信するプログラムと、最先端の授業研究を学ぼうというプログラムを検討中であり、関連諸分野の研究者にも声をかける予定であることが報告された。

5) その他 (今川恭子事務局長)

大会発表資料は、外部から問合せがあった時のために1年間、1部を保存すること、現在事務局に保存されている過去の大会の発表資料については、理事会でも検討し、廃棄することとなったこと、また、今回は、業者から大会プログラムと学会誌の発送を行ったが、個人情報の取扱について安心できる認定された業者に委託している旨、報告があった。あわせて、新しい会員情報管理システムにおいてメールアドレスを正しく登録することが大事であり、正しいメールアドレスの登録をお願いしたいとの要請があった。

5. 審議事項

1) 平成23年度会計報告 (島崎篤子・杉江淑子前理事)・監査報告 (本多佐保美前会計監事)

大会プログラム掲載資料にもとづき、平成23年度一般会計、その他会計について会計報告が行われた。あわせて、名簿発行と会員情報システム構築があり、支出が見込まれたが、事務局の努力と会員数の増加等により相応の繰越金を捻出することができたことが報告された。監査の結果、間違いがないことが承認された。

2) 平成24年度事業計画および補正予算

(1) 事業計画の変更について (今川恭子事務局長)

総会資料にもとづき、平成24年度事業計画の日にちが確定したことが報告され、承認された。

(2) 補正予算案について (島崎篤子理事)

大会プログラム掲載資料にもとづき、補正予算案が提案され承認された。基本的方針としては、特別予算の方に上乗せをする形で、旅費、交通費、事務費、人件費、選挙積立金、ゼミナール基金、日韓ワークショップの補助、研究出版基金等の予算が補正された。▶17頁に掲載

3) 平成25年度事業計画 (今川恭子事務局長)

総会資料にもとづき、平成25年度事業計画が提案され、承認された。

4) 平成25年度予算 (島崎篤子理事)

大会プログラム掲載資料にもとづき、平成25年度予算案が提案され、承認された。平成25年度は、ゼミナールと選挙がある。

平成24年度事業計画修正案 (修正箇所は白抜き)

平成24年	
4月中旬～下旬	平成23年度会計監査会
5月13日	平成24年度第1回編集委員会 平成24年度第1回常任理事・理事会
6月15日	第43回大会研究発表・共同企画申し込み締切
6月下旬	『音楽教育学』第42巻第1号発行 ニュースレター第48号発行
7月上旬	第43回大会研究発表受理通知
7月29日	平成24年度第2回常任理事会
8月2日	平成24年度第2回編集委員会
8月25・26日	日韓音楽教育ワークショップ
8月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.10.No.1発行 ニュースレター第49号発行 第43回大会プログラム発送
10月6日	平成24年度第3回編集委員会 平成24年度第3回常任理事会・第2回理事会

10月7・8日	第43回大会・総会 会場：東京音楽大学
12月下旬	『音楽教育学』第42巻第2号発行 ニュースレター 第50号発行
平成25年	
2月中旬	平成24年度第4回編集委員会 平成24年度第4回常任理事会
3月末日	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.10.No.2 発行 ニュースレター第51号 発行 平成24年度会計決算

5) 編集委員会規定改正について（尾見敦子編集委員長）

総会資料にもとづき下記のとおり提案され、承認された。

改正（新）	現行（旧）
第2条（5） 委員会は、『音楽教育実践ジャーナル』に投稿された論文について複数の査読者に査読を依頼し、この結果をもとに採否を決定し、理事会に報告する。	第2条（5） 委員会は、『音楽教育実践ジャーナル』に投稿された論文、報告について複数の査読者に査読を依頼し、この結果をもとに採否を決定し、理事会に報告する。

6) 第44回大会について（加藤富美子会長）

平成25年10月12日・13日に弘前大学において開催される予定であることが報告された。同大学の今田匡彦会員より挨拶があり、次年度の開催について承認された。弘前大学教育学部と弘前大学国際交流センターとの共催となること、男女共同参画推進室の事業の一環で託児所が設置されることが報告された。

7) 第45回大会候補地について（加藤富美子会長）

関東地区で開催される予定であることが報告され、承認された。

6. 議長解任

7. 閉会の辞（有本真紀副会長）

閉会の辞に先立ち、加藤会長より、今大会には第1日目で400名に迫る参加があったこと、そして実行委員会への御礼が述べられた。

平成25年度事業計画（案）

4月中旬～下旬	平成24年度会計監査会
5月初旬	平成25年度第1回編集委員会 平成25年度第1回常任理事・理事会
6月初旬	第44回大会研究発表・共同企画申し込み締切
6月下旬	『音楽教育学』第43巻第1号発行 ニュースレター 第52号発行 第21期日本音楽教育学会会長・理事選挙
7月上旬	平成25年度第2回常任理事会 平成25年度第2回編集委員会 第44回大会研究発表受理通知
8月	日本音楽教育学会 第12回音楽教育ゼミナール
8月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.11.No.1発行 ニュースレター 第53号発行 第44回大会プログラム発送
10月11日	平成25年度第3回編集委員会 平成25年度第3回常任理事会・第2回理事会
10月12・13日	第44回大会・総会 会場：弘前大学
12月下旬	『音楽教育学』第43巻第2号発行 ニュースレター 第54号発行
平成26年	
2月中旬	平成25年度第4回編集委員会 平成25年度第4回常任理事会
3月末日	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.11.No.2発行 ニュースレター第55号発行

平成 23 年度会計報告

平成23年度会計報告

I 一般会計

収 入			支 出		
科 目	予 算	決 算	科 目	予 算	決 算
前年度繰越金	3,071,155	3,071,155	大会運営費	1,600,000	1,522,036
正会員会費*	10,234,000	10,395,000	大会本部経費	700,000	700,000
			事務局経費	700,000	742,036
学生会員会費	20,000	12,000	フロンティア研究	200,000	80,000
団体会員会費	40,000	30,000	学会誌費	2,900,000	2,514,710
賛助会員会費	400,000	290,000	音楽教育学会発行費	1,500,000	1,454,000
学会誌売上金	500,000	510,650	楽譜ジャーナル発行費	1,400,000	1,060,710
本誌代		441,600	ニュースレター費	300,000	294,900
送料収入		68,650	例会運営費	500,000	461,965
大会参加費	1,300,000	1,490,716	通信・郵送費	1,180,000	784,215
雑収入	138,743	836,486	会議費	12,000	1,744
			旅費・交通費	1,600,000	1,430,460
			翻訳費	10,000	0
			事務局費	4,583,000	4,298,059
			事務費	300,000	557,262
			人件費	2,000,000	1,780,550
			事務局運営費	2,250,000	1,927,127
			事務局員保険費	33,000	33,000
			分担金	222,000	221,176
			選挙積立金	225,000	225,000
			ゼミナル基金	75,000	75,000
			研究出版基金	0	0
			学会基金	50,000	50,000
			国際交流基金	100,000	100,000
			予備費	2,346,898	259,102
			小 計	15,703,898	12,238,367
			次年度繰越金	0	4,397,640
計	15,703,898	16,636,007	計	15,703,898	16,636,007

* (7,000 × 1,正会員数1462名)見込計算

II 研究出版基金 現在高 ¥2,863,635

収入		
平成22年度までの積立金	¥2,863,177	
23年度利息	¥458	
		¥2,863,635

III 学会基金 現在高 ¥1,898,967 (①-②)

収入		
平成22年度までの積立金	¥2,301,280	
平成23年度積立金	¥50,000	
23年度利息	¥367	
		¥2,351,647 ①
支出		
名簿作成費	¥451,420	
振替手数料	¥420	
残高証明発行手数料	¥840	
		¥452,680 ②

IV ゼミナル基金 現在高 ¥1,227,629 (①-②)

収入		
平成22年度までの積立金	¥1,280,022	
平成23年度積立金	¥75,000	
平成23年度利息	¥189	
神田ゼミナル基金	¥172,418	
		¥1,527,629 ①
支出		
神田ゼミナル補助費	¥300,000	
		¥300,000 ②

V 国際交流基金 現在高 ¥100,001

収入		
平成23年度積立金	¥100,000	
利息	¥1	
		¥100,001

VI 選挙積立金 現在高 ¥135,989 (①-②)

収入		
平成22年度までの積立金	¥280,974	
平成23年度選挙積立金	¥225,000	
平成23年度利息	¥58	
		¥486,032 ①
支出		
第20期選挙運営費	¥350,043	
		¥350,043 ②

◎ 平成23年度決算を上記の通り報告いたします。

平成24年4月30日 会計担当 島崎 篤子
杉江 淑子

◎ 上記の通り相違ないことを監査いたしました。

平成24年4月30日 会計監事 田中 健次
本多 佐保美

4-4 編集委員会から報告

編集委員会委員長 尾見 敦子

○抜き刷りがスタートしました。

『音楽教育実践ジャーナル』10-1号から、抜き刷りを作成できることになりました。これは希望者が執筆者の個人負担で作成するものです。編集委員会事務局が、著者と印刷所を仲介します。初校のお知らせの時に事務局が著者に抜き刷りの希望があるかどうかをお尋ねします。そのあとは著者と印刷所との直接のやりとりになります。

○書評システムがスタートしています。

書評公募のページが学会のホームページに開設されました。学会誌掲載の書評対象候補をお寄せください。また、そこから多くの書評の投稿を期待しております。

○「編集委員会規定」の改正が総会で承認されました。

昨年の総会后に、「投稿規定」と「編集委員会規定」の齟齬が見つかり、持越しになっていた「『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定」の改正にともなう「『編集委員会規定』の改正」が総会で承認され、両者の整合性が確保されました（経緯はニュースレターNo.46に記載）。なお、「投稿規定」に変更がないことを重ねてお伝えします。

○第3回編集委員会報告

本年度第3回編集委員会は、2012年10月6日(木)に東京音楽大学で開催されました。委員会での報告、協議内容は以下の通りです。

1. 『音楽教育学』・『音楽教育実践ジャーナル』進捗状況の報告

担当編集委員から進捗状況の報告があり、以下のことが確認された。

1) 『音楽教育学』vol.42 No.2

「共同企画」の掲載ページ数は、件数（総数10件）の関係で、1件あたり5ページと決定しており、すべての原稿執筆依頼も完了している。例会報告、書評等を合わせ、分厚い号になる予定である。

2) 『音楽教育実践ジャーナル』vol.10 No.2

特集テーマ「音楽教育におけるアウトリーチを考える」に多くの投稿があったが、最終的に3本を特集投稿として掲載することになった。

3) 『音楽教育実践ジャーナル』vol.11 No.1

特集テーマ「音楽教育とジェンダー」の依頼原稿についてはすでに確定しているが、その他の誌面の構成についても決定した。多彩な内容になりそうである。

4) 『音楽教育学』vol.43 No.1

書評については、学会のホームページの書評公募のコーナーに挙げられている本のリストから「クリストファー・スモールの『ミュージッキングー音楽は<行為>であるー』」が選定された。「研究動向」のテーマを早急に決定することとなった。

5) 『音楽教育実践ジャーナル』vol.11 No.2

特集テーマを「音楽教育と電子テクノロジー」とする方向性が決定された。

2. 投稿論文の状況

『音楽教育学』への投稿論文が1本は掲載可となり、他は進行中である。『音楽教育実践ジャーナル』への投稿論文が進行中である。

3. 投稿時のチェックリストにある、「写真等の使用にあたって権利者、被写体となった人（またはその保護者や責任者）から投稿・公刊の承諾を得ている」、「楽譜・図表・図版その他の著作権、版権に配慮している」に関して、的確な対応が強く求められる。

4. 編集費を有効活用して、より良い誌面作りを行っていくことが確認された。

○おわりに

『音楽教育学』の規定の改正から一年たちました。新しく設けられた「論考」をはじめ、会員の皆様からのさまざまな投稿をお待ちしています。

投稿時の投稿の種類に関して、再度お伝えします。投稿者が選択した投稿の種類を、修正原稿で変更することはできません（その際は新規投稿となります）。査読は一貫して、投稿者の選択した投稿の種類に沿って行われます。また、『音楽教育実践ジャーナル』への投稿時には、申込書に「種類の希望」をお書きください。「論文」と他の種類を併記される場合が散見されますが、執筆にあたっては、まず種類を選択し、種類に適した執筆がなされるものでありましょう。

これも再度のお願いになりますが、投稿原稿は脚注ではなく、後注で作成してください（印刷時に脚注となります）。引用・参考文献は注の後となります。注も、引用・参考文献も、本文と同じサイズで原稿を作成してください。規定枚数に収まっているかの分量の算出のために、そのようお願いしています。ホームページ上の「投稿の手引き」をご参照いただき、不明な点は、事務局内編集委員会事務局にお問い合わせください。編集委員一同、よりよい学会誌の編集をめざして、精一杯努めて参りますので、どうぞよろしく願いいたします。

4-5 第12回音楽教育ゼミナールについて

2013年度の音楽教育ゼミナールは「2本立て」のプログラムです。
どちらかを選び、ふるってご参加ください！！

来年度に開催される音楽教育ゼミナールの概要が決まりましたので、お知らせいたします。

本ゼミナールは、2本立てのプログラムを設定します。ひとつは、国際的に開かれた若手研究者を支援する「英語で研究を海外に発信しよう！」、もうひとつは、実践者と研究者がともに学び合う「最先端の授業研究を学ぼう！」です。2本のプログラムの趣旨・課題意識は下記のとおりです。学校や保育等の現場にかかわる実践者、これまでに日本語では実績をお持ちの研究者、大学院等の学生……どちらかのプログラムを選んでふるってご参加ください。

◇開催日：平成25年（2013年）8月24日（土）～25日（日）

◇会場：立教大学（池袋キャンパス）

●「英語で研究を海外に発信しよう！」

日本には優れた音楽教育研究及び実践がたくさんあります。これらは決して欧米に劣るものではありません。しかし、例えば国際学会や英語での出版といった海外への発信となると残念ながらその数は限られてしまいます。一方、他のアジアの国々では、若手研究者を中心に積極的に海外に向けて情報を発信しています。以上を踏まえ、今回は海外に学ぶではなく、「海外に発信する」をテーマに、英語と日本語とをめぐるさまざまな問題に対処できれば、と考えます。

●「最先端の授業研究を学ぼう！」

前回の神田ゼミナールの成果をさらに発展させるために、「授業研究」をはじめとする様々な実践研究に役立つ情報の交換、研究方法の追究を目指します。「最先端」と銘打ってはいますが、流行の手法を追うばかりではなく、根本的に授業研究の在り方を問い直したいと考えています。そのために、ドキュメンテーションの蓄積に関して研究が進んでいる保育のフィールド、音楽科以外の授業研究に関して様々な情報を持つ教育学からも多くを学びたいと思います。

講師として、河邊貴子（聖心女子大学）と藤江康彦（東京大学）の両氏を予定しています。

ゼミナール実行委員一同（今田匡彦・疇地希美・小川容子・柴崎かがり・水戸博道・石井ゆきこ・今川恭子・権藤敦子・佐野靖・村上康子）

4-6 選挙管理委員会からお知らせ

第 21 期選挙管理委員会委員長 中嶋 俊夫

第 43 回総会でご挨拶させていただきましたように、今年度 4 月に第 21 期選挙管理委員として鈴木慎一郎、寺田己保子、村上康子、宮本憲二、中嶋俊夫の 5 名が加藤富美子会長から委嘱を受け、同委員会が発足し、互選により中嶋が委員長、寺田が副委員長に選出されました。10 月 7 日に第 1 回委員会を開催し、第 20 期委員会からの引き継ぎ事項を確認しながら来年度の選挙にむけて作業内容や日程を検討しました。

次期選挙は平成 25 年 6 月に実施される予定ですが、委員会としまして公正で正確な選挙が進められますよう準備してまいります。会員の皆様には、選挙へのご理解とご協力をいただきますようよろしくお願いいたします。

5 事務局より

【事務局に E メールをお送りください】

事務局長 今川 恭子

◇ 新しい会員情報管理システムでは、皆様の E メールアドレスをご登録戴くことが重要です。たとえば、会費納入を事務局で確認すると、そのお知らせメールが皆様のお手元に届きません。アドレスをご登録戴いていない方、「会費を納めたのにメールが来ない」という方は、事務局に E メールをお送りください。件名「アドレス登録確認」として本文にご住所とお名前を記入するだけで結構です。なお、アドレス登録の際には「公開の可否」「名簿掲載の可否」を同時にお知らせください。

◇ 学会誌『音楽教育学』創刊号～第 41 巻 第 2 号までをセット販売しております。価格は全 83 巻で 67000 円（送料別）です。申し込みは随時メール、または FAX にて受付しております。また、引き続きバックナンバー（『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』）の個別販売も行っております。価格等は学会ホームページをご参照ください。

申込先：日本音楽教育学会事務局 onkyoiku@remus.dti.ne.jp

記入必要事項：申込者名、連絡先住所、電話番号、送り先住所

※購入に際し、請求書、領収書などの書類が必要な場合はお知らせください。

※『音楽教育学』バックナンバーには、発行当時の原本のものと、新しくコピー製本したものとがあります（内容は同じです）。

◆事務局開局時間 月・水・金・・・ 9:00～15:00

年末年始の閉局期間は下記の通りです。この間の事務局へのご連絡は、E-mail または FAX にてお願いいたします。

閉局期間 2012 年 12 月 29 日（金）～2013 年 1 月 10 日（木）

E-mail (onkyoiku@remus.dti.ne.jp) FAX:042-381-3562

事務局スタッフ：亀山さやか・坂本友里（編集担当）・長山弘（HP 担当）・大平奈緒

..... 【編集後記】

皆様のスケジュール帳は、何月始まりですか。これまで何となく「12 月始まり」のスケジュール帳を使っていたのですが、思い切って「3 月始まり」にしようかなと考えています。ただし買い替えるまでの間、どこにメモしておくかが問題ですが・・・。来年は巳年。脱皮する姿から、これまでの古い考えから抜け出す「新生」や「再生」の年と考える人もいますようです。皆様にとって、来る 2013 年が素晴らしい年となりますように。

小川容子・大沼覚子 記

